

子ども期に形成された親のイメージと現代青年の感情制御行動

大阪学院大学
武庫川女子大学

荘巖舜哉
沼田 宙

The Relationships between Emotion Regulation of Youth and Their Parental Images Based on Childhood Memories

Osaka Gakuin University
Mukogawa Women's University

SOGON, Shunya
NUMATA, Hiroshi

キレルという行為に代表される衝動性が、小学生時代を中心とした親子の感情的関わりに対する評価とどのように関連しているのかという問題を、大学生を対象に検討した。親子関係の評価は反意語で組み合わせられた12の形容詞対に対する5件法評価でおこなわれた。その結果、父親に対してネガティブ・イメージが強い男子学生は、自らをキレやすい方向に評価した。また彼らは、母親に対してもネガティブ・イメージを強く形成していた。男子学生に比較して女子学生の方が衝動性が強いと自己評価しているにも関わらず、親に対して形成された感情イメージは、キレルという自己評価にはあまり結びついていなかった。

【キー・ワード】感情制御，親子関係，青年期，親に対する感情イメージ

The relationships of university students' emotion regulation tendencies and their parent-child relationships during elementary school age were investigated. Participants were students selected from three different universities. Due to the reliability score of MAS, 79 subjects were excluded from the data analyses. Child-parent relationships were evaluated by the semantic differential method, using 12 adjective pairs. The male students having a negative evaluation towards their fathers reported that they have less emotion regulation and tolerance. They also have negative memories of their mothers. In contrast, the male students having positive memories of their fathers reported that they have good tolerance in their emotion regulation. The female students reported that their memories of childhood towards their parents had less effect on their emotion regulation.

【Key Words】emotion regulation, impulsive behavior, parent-child relationships, university students.

問 題

ボウルビー (Bowlby, 1969, 1973, 1980) は、母子の間に形成されるアタッチメントは、子どもの生き残りを保証するために進化生態学的に準備されてきた動機づけシステムであると考えられる。例えばニホンザルの母親は、離乳期に達するまでは常にコドモを自分の手の届く範囲に留めおこうとするが、それは母親の保護なしではコドモが捕食者に襲われたり、死に直結する数々の危険にさらされるからである。

ヒトの子どもも例外ではない。ポルトマン (Poltmann, 1951) は、ヒトが進化の頂点に立つことが出来たのは長い子ども期に様々な社会的学習をおこなえる故であることを指摘したが、言葉を換えればそれはヒトの乳幼児が無力な状態で長い成長期を過ごすことでもある。無力というこの現象は、特に3歳未満の乳幼児に著しい。この時期に特徴的な介護者に対する全面的な依存は、両者の間に強い感情的な絆が形成されていなければ困難であり、母子はアタッチメントという感情の絆で固く結ばれる。

この時形成された母親に対する信頼は、その後の対人関係形成原構造モデルとなる。つまり成長過程で、子どもたちが常に人間関係のあり方として参照するのが、発達初期の母子関係フレームであるとボウルビーはいうのである。もちろん子どもが大人になっていく過程では、特に学童期以後、仲間からの影響を強く受けるし、社会・文化の影響も非常に大きい。成長ということは、親の影響が薄れ、自分の独自性を獲得していくことなのである。しかし、発達初期において母親との関係が不安定であった子どもには不安が強く、自己や自我を防衛するために過剰に攻撃的になったり、逆に臆病になったりする。

ボウルビーのこのような考え方に対しては批判もある。例えばティザード (Tizard, 1977) は、ボウルビーのモデルは施設収容児に対しては当てはまるが、親自身も多様に化する一般家庭の子どもにこの考え方を一律に適用するのは無理があると指摘する。確かに人間は非常に可塑性に富んでおり、生後数年間の経験が、その人の残り人生すべてを決定してしまうほど硬直化したものではあり得ない。また、ボウルビーのアタッチメント理論が、母親は子どもにとって絶対であるという母性神話につながっていったことも事実である。しかしそれはボウルビーが意図したことではなく、母親に対して形成される不安定な信頼関係が子どもに不安を醸成させ、それが社会に対する攻撃に姿を変えて表出されることを指摘しただけなのである。

ところで人間の行動は、他の多くの動物同様、良い・悪いという感情の次元を基礎としている。良い、つまり好き、あるいは生存にとって適応的であるという評価が下されれば接近という行動が成り立つし、悪い、つまり嫌い、あるいは生存にとって不都合であるという評価が下されれば回避という行動が成り立つ。確かに人間は、時に理性という、他の動物には見いだせない論理的な価値尺度に従って行動する動物でもある。しかしこの規範は、言語という記号を駆使して初めて意識化される存在であることを考慮するならば、理性が我々の意識に備わるようになったのはせいぜいのところ3万年前、恐らくは農耕を開始し文明を創造してからの8千年に満たないという推測が成り立つ。

人類の文字の歴史を考えると、8千年という時間は決して短くはない。しかしながらファン・フー

フ (van Hoof, 1972) が指摘するように、ヒトや動物の心理・生理的状态が表情やしぐさといったノンバーバルなチャンネルに表出されてきた生態学的な進化の時間に比較するとき、理性を自家築籠中のものとするにはあまりにも短い時間である。だからこそ理性をつくり出した人間といえども、行動面では言語よりも古い、感情というノンバーバルな記号体系に依存するところが大きいのである。

当然、言葉を理解する以前の子どもたちは、もっぱらノンバーバル情報に依存して、環境との接点から意味をくみ取る。それは長い進化の歴史が動物に準備してきた生存のための技能であり、人間を含めて全ての動物は場や空間、あるいは物や個体の関係に意味を見つけ出す能力を持つのである。人間は其中でも最も進化した社会的動物であり、他者との関係を作り上げることが生存にとって必須である。そこで新生児は、何をあいてもまず、人間の表情や音声に意識を焦点化するように遺伝的にプログラムされている。この社会的関係を作り上げる能力、つまり相互に随伴的で互酬的な社会的やりとりが、新生児を初めとする乳児に豊富に備わっていることは、乳児の視線行動や母子間に発生する視線の共有、つまり共同注意の実験や社会的参照の研究などが明らかにしている (e. g., Baron-Cohen, 1991; Tomasello, 1995)。

さらに重要なことがある。人間の相互作用には感情が随伴するが、親子という生物学的結びつきをつくり出すのも感情であり、子どもたちは感情を介在させた信頼の世界に生きる。例えばその発達初期、乳幼児の世界は間主観的世界であるし、母親もまた子どもに強く感情移入し、共感的関係を作り上げる。アタッチメントが単なる一次的動因でない理由は、それが連帯という人間の社会的感情を生み出すからである。そのため、感情的交流に齟齬が発生すると、子どもの感情制御や感情耐性の形成のみならず、表情やしぐさを中心とした感情情報のエンコーディング・デコーディング能力そのものにも問題が発生する。

当然、安定愛着型の子どもたちは感情制御に優れる (Bowlby, 1983)。なぜならば介護者が安全愛着基地として機能するとき、子どもたちは自分が安全に保護されているという感覚を強め、他者に対する肯定的な信頼感を形成するからである。そのため、このような環境で育つ子どもの不安は低いし、仮に不安に陥ったとしても回復が早い。また、柔軟性もある。

逆の場合には、子どもに不安が形成される。不安は、ケルケゴールの表現を借りるならば「死に至る病」であるが、不安定な母子関係がこれをつくり出す。不安はまた、子どもの感情情報能力に脆弱性をつくり出す。他者の発信する感情情報を正しく処理できないとき、社会生活や対人関係形成スキルに悪影響が生じる。そのことは、アダルト・アタッチメント研究に数多く証されている (e.g., Hazan, & Shaver, 1994; Griffin, & Bartholomew, 1994; Rholes, Simpson, Campbell, & Grich, 2001)。

アダルト・アタッチメント研究はメインとその共同研究者たち (Main, Kaplan, & Cassidy, 1985) によって始められたが、発達初期に形成される母子関係が、その後の人間関係全般に強く影響を及ぼしていることを示唆している。例えば幼児期に安定愛着を形成していた青年は、自我の柔軟性に優れ、不安が低く、攻撃的傾向が少ないという評価を友人から受け、自分でも否定感情に陥ることが少なく、効能感が高いと報告した。逆に2種類に大別される不安定愛着型は、自我の柔軟性に欠けると友人から評価され、不安や否定感情に陥りやすく、不快感などが強いと自己報告した (Kobak & Sceery, 1988)。

このような先行研究に見るように、幼少期に形成される親子の心理的關係は、子ども期だけでなく青年期にあっても、あるいは成人後の結婚生活においても、人の一生を通じて人間關係全般に少なからぬ影響を及ぼす。

そこで本研究では、幼児期から少年期にかけての親子關係が青年期の衝動性、及び感情制御のあり方に影響を及ぼしている可能性を探ることを目的とした。もちろんこのような調査には、具体的な想い出の内容の検討が必要不可欠であるが、被験者の自由記述を得点化するシステムは現在開発中であり、今回は自由記述の内容については割愛する。従ってここでは、形容詞対に表現される親子關係の質と、キレやすさの關係を検討する。

方 法

被験者：0 学院大学学生，K 女子大学学生，および国立大学法人 N 女子大学学生を対象に，それぞれ講義時間中に MAS，キレる尺度，子ども期の両親に対するイメージ，楽しかった思い出・腹が立った思い出（それぞれ両親別）を組み合わせた，「人生に対する調査」を実施し，終了後に回収した。

これらの学生の調査に対する信頼性のスクリーニングとして MAS を用い，K（妥当性）尺度 11 点以上，L（嘘）尺度 10 点以上の得点者を，回答の信頼性に欠ける被験者として除外した。その結果，男子学生 35 名，女子学生 44 名が除かれ，男子学生 135 名，女子学生 120 名のデータを分析対象資料とした。男子学生の平均年齢は 20.5 歳，女子学生の平均年齢は 19.4 歳であった。女子学生に関しては 0 学院大学，K 女子大学，N 女子大学を一緒にして集計した。

質問紙：キレる行動に関する質問は，下坂たち（2000）が作成した，4 件法で聞き出す衝動性 8 項目と，5 件法で聞き出したキレた経験（頻度）を，本調査の項目として利用した。

両親に対して形成されているイメージは，莊巖たち（2000）が静岡県水窪町と山形県鶴岡市，鹿児島県日吉町の 3 カ所でおこなった，中高年の人々の人生観に対する聞き取り調査で用いた，感情語を中心とした 12 の形容詞対で評価を求めた。それぞれは反意語の対構造になっており，5 件法での評価である。両親に対する思い出が形成された時期は，小学校時代というおおよその制限を加えた。なお今回の分析では割愛するが，両親に対する楽しかった思い出と腹が立った思い出の自由記述を，父親・母親のそれぞれに求めた。

結 果

表 1 は，キレる尺度の 9 項目に対する男女学生の平均値と SD をまとめたものである。質問内容によっては等分散を仮定できる項目と仮定できない項目があるが，検定はこの条件を考慮した上で，男女 2 群間の差を調べるために t 検定をおこなった。なお，等分散を仮定しない項目は，4，7，8，9 番である。

表1. キレ項目に関する男女の平均値および標準偏差

項目	性別	N	平均値	標準偏差
すぐカッとなる方である	男性	135	2.34	0.90
	女性	120	2.39	0.90
思い通りにならないと暴力的になる	男性	135	1.81	0.89
	女性	120	1.79	0.86
苦しいことがあっても、落ち着いていることができる	男性	135	2.73	0.76
	女性	120	2.60	0.71
たいがいの場合、穏やかな気分であることができる	男性	135	2.99	0.73
	女性	120	2.78	0.90
落ち着いた人間である	男性	135	2.75	0.78
	女性	120	2.48	0.79
いつでも自分自身をコントロールできる	男性	135	2.81	0.81
	女性	120	2.48	0.71
決して許すことができないと思う人たちがいる	男性	135	2.52	1.20
	女性	120	2.60	1.08
するべきでないと分かっていることをやめられない	男性	135	2.43	0.97
	女性	120	2.71	0.89
キレの頻度	男性	135	1.96	0.66
	女性	120	1.88	0.71

その結果、項目4の、「私はたいがいの場合、穏やかな気分であることができる」という質問に対し、男女間に有意差が認められ、男子学生の方が質問に対する肯定的な回答をした ($t=1.95$, $df=230$, $p<.05$)。項目5の、「落ち着いた人間である」という質問にも有意差が認められ、男子学生の方が肯定的な回答をした ($t=2.78$, $df=253$, $p<.01$)。

項目8の、「するべきではないとわかっていることを止められない」という質問にも男女間で有意差が認められ、女性の方がその通りだという方向で回答をおこなった ($t=1.95$, $df=230$, $p<.05$)。なお、キレる行動の頻度では、欠損値を除外したため、自由度は244となるが、男女間に違いは見いだせなかった。

図1に、12の形容詞対で表現された、子ども期における父親に対するイメージの男女平均値を示す。図に示されたように、好き-嫌い、親しみやすい-親しみにくいといった感情イメージ評価の評価方向は男女間で類似しているが、固いや大きいといった物理的特性イメージは、ややその傾向を違えている。

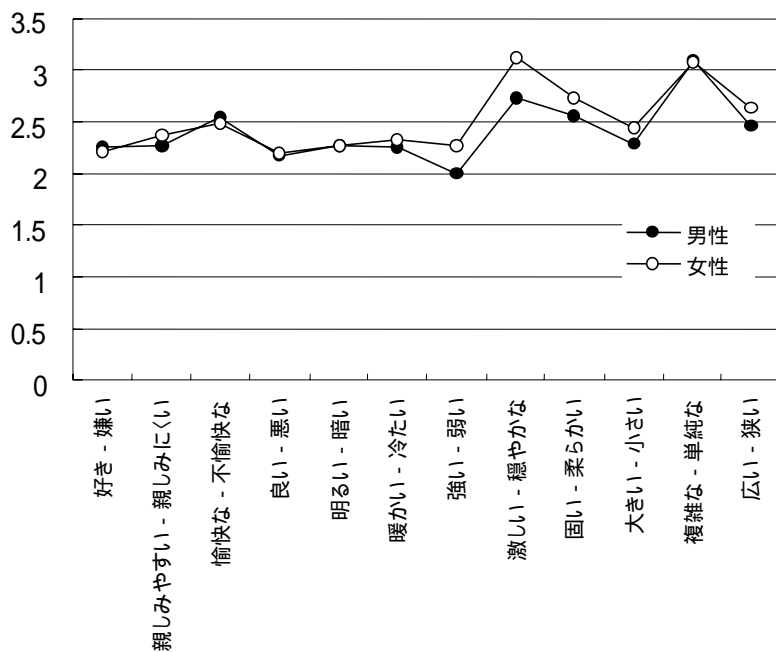


図1. 父親のイメージに対する男女差

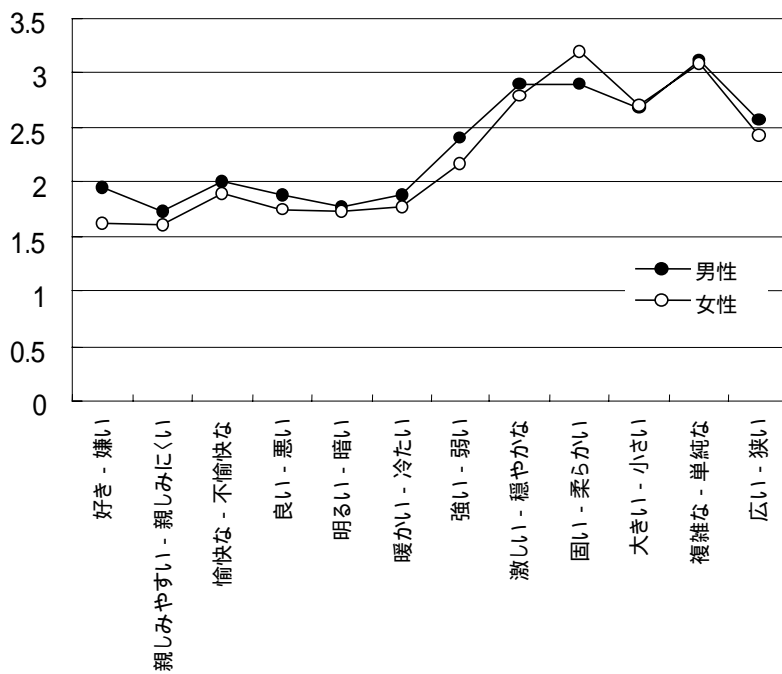


図2. 母親のイメージに対する男女差

形容詞対によっては等分散を仮定できる項目と仮定できない項目があるが、この条件を考慮した上で、男女2群間の差の検定をおこなった。なお、等分散を仮定しない項目は、親しみにくい - 親しみやすい、暖かい - 冷たいという形容詞対であった。

その結果、父親に対する激しい - 穏やかなという形容詞対に男女間に有意差が認められ、女子学生の方が父親を穏やかであったと評価していた ($t = -2.53, df=251, p < .01$)。また、強い - 弱いイメージでは、有意差は得られなかったが、女子学生の方が父親に対して強いというイメージを形成していた ($t = -1.97, df=252, p < .06$)。

図2は、同じく12の形容詞対で評価された、子ども期の母親イメージの男女平均値である。図に示されたように、全体としてみれば男子学生の方が母親に対して肯定的評価を下している。t検定の結果、母親に対するイメージで男女間に有意差が認められたのは、好き - 嫌いの形容詞対であった。男子学生は女子学生よりも、母親に対して好きという方向にイメージ評価した ($t = 2.84, df=253, p < .001$)。有意差には至らなかったが、他にも強い - 弱い、固い - 柔らかいの形容詞対において、有意な傾向があった。強い - 弱い形容詞対では、男子学生が母親を弱いイメージでとらえていた ($t = 1.73, df=253, p < .08$)。一方、固い - 柔らかいのイメージでは、女子学生は、母親を柔らかいイメージでとらえていた ($t = -1.95, df=252, p < .06$)。

表2. キレ項目高 - 低群男性の父親・母親に対するイメージ評定

項目	父親に対するイメージ評定			母親に対するイメージ評定				
	キレ得点	N	平均値	標準偏差	キレ得点	N	平均値	標準偏差
好き - 嫌い	低群	70	2.09	0.97	低群	72	1.75	0.85
	高群	63	2.41	1.04	高群	63	2.19	1.08
親しみやすい - 親しみにくい	低群	71	2.08	1.00	低群	72	1.63	0.90
	高群	63	2.49	1.23	高群	63	1.84	0.94
愉快な - 不愉快な	低群	71	2.37	1.05	低群	72	1.94	0.92
	高群	63	2.73	1.10	高群	63	2.08	1.08
良い - 悪い	低群	71	1.99	0.93	低群	72	1.75	0.93
	高群	63	2.37	1.10	高群	63	2.03	0.88
明るい - 暗い	低群	71	2.13	0.92	低群	72	1.60	0.76
	高群	63	2.43	1.09	高群	63	1.95	0.94
暖かい - 冷たい	低群	71	2.06	0.88	低群	72	1.72	0.92
	高群	63	2.46	1.01	高群	63	2.05	0.97
強い - 弱い	低群	71	1.90	1.00	低群	72	2.35	1.12
	高群	63	2.13	1.07	高群	63	2.49	1.12
激しい - 穏やかな	低群	71	2.62	1.21	低群	72	3.08	1.18
	高群	62	2.85	1.29	高群	63	2.68	1.08
固い - 柔らかい	低群	71	2.46	1.09	低群	71	3.04	1.14
	高群	63	2.65	1.17	高群	63	2.75	1.20
大きい - 小さい	低群	71	2.23	1.08	低群	71	2.61	1.18
	高群	63	2.37	1.10	高群	63	2.75	0.98
複雑な - 単純な	低群	71	3.20	1.10	低群	71	3.21	1.01
	高群	63	2.98	1.18	高群	63	3.02	0.99
広い - 狭い	低群	71	2.25	1.00	低群	72	2.36	1.04
	高群	63	2.71	1.11	高群	63	2.79	0.99

8項目のキレる行為に対する回答を、全く当てはまらない(1点)から、よく当てはまる(4点)にそれぞれ得点化し(逆転項目の場合は1点を4点に換算)、総合計の中央値でキレやすい群とキレにくい群に分け、男女それぞれが父親及び母親をどのような形容詞対のイメージでとらえているのかを検討した。これを表2に示す。

表3. キレ項目高 - 低群女性の父親・母親に対するイメージ評定

項目	父親に対するイメージ評定			母親に対するイメージ評定				
	キレ得点	N	平均値	標準偏差	キレ得点	N	平均値	標準偏差
好き - 嫌い	低群	53	2.19	1.24	低群	53	1.43	0.60
	高群	67	2.24	1.12	高群	67	1.76	1.07
親しみやすい - 親しみにくい	低群	53	2.28	1.31	低群	53	1.49	0.72
	高群	67	2.42	1.32	高群	67	1.69	1.09
愉快的 - 不愉快的	低群	53	2.38	1.30	低群	53	1.70	0.80
	高群	67	2.55	1.16	高群	67	2.04	1.13
良い - 悪い	低群	53	2.23	1.27	低群	53	1.60	0.66
	高群	67	2.15	1.05	高群	67	1.87	1.07
明るい - 暗い	低群	53	2.17	1.27	低群	53	1.60	0.79
	高群	67	2.34	1.08	高群	67	1.84	0.99
暖かい - 冷たい	低群	53	2.28	1.17	低群	53	1.68	0.85
	高群	67	2.37	1.13	高群	66	1.85	1.13
強い - 弱い	低群	53	2.36	1.24	低群	53	2.23	1.09
	高群	67	2.21	1.04	高群	67	2.13	1.10
激しい - 穏やかな	低群	53	3.08	1.21	低群	53	3.02	1.15
	高群	67	3.16	1.26	高群	67	2.61	1.29
固い - 柔らかい	低群	53	2.96	1.19	低群	53	3.26	1.18
	高群	67	2.54	1.08	高群	67	3.13	1.19
大きい - 小さい	低群	52	2.67	1.17	低群	53	2.62	1.00
	高群	67	2.25	0.97	高群	67	2.76	1.19
複雑な - 単純な	低群	52	3.13	1.12	低群	53	3.21	1.04
	高群	67	3.04	1.25	高群	67	2.97	1.25
広い - 狭い	低群	53	2.72	1.21	低群	53	2.32	1.11
	高群	67	2.58	1.09	高群	67	2.52	1.17

その結果, 男子学生では5つの形容詞対イメージに有意差が認められ, 他に2つの形容詞対に有意な傾向が認められた。これをそれぞれの形容詞対でみると, キレル高得点群の男子学生は, 父親を親しみにくいというイメージで評価しており ($t=-2.09, df=119, p<.04$), また冷たいというイメージ評価をおこなっていた ($t=-2.47, df=132, p<.01$)。さらに彼らは悪いというイメージで父親を評価しており ($t=-2.16, df=132, p<.03$), 不愉快なというイメージでもとらえていた ($t=-1.97, df=132, p<.05$)。その他にも彼らは, 父親を嫌いというイメージでとらえる傾向にあり ($t=-1.87, df=131, p<.06$), 暗いというイメージでとらえる傾向も認められた ($t=-1.74, df=132, p<.09$)。

一方, キレル高得点群の男子学生は母親に対して嫌いというイメージを形成しており ($t=-2.65, df=133, p<.01$), また冷たいというイメージでもとらえていた ($t=-1.99, df=133, p<.05$)。さらに彼らは悪いというイメージで母親をとらえ ($t=-2.42, df=133, p<.02$)、激しいというイメージ ($t=2.05, df=133, p<.04$)、暗いというイメージを形成していた ($t=-2.42, df=133, p<.02$)。その他にも彼らは, 母親を悪いというイメージでとらえる傾向にあった ($t=-1.08, df=133, p<.07$)。

表3は, 女子学生キレ高得点群と低得点群の, 父親及び母親に対するイメージ比較である。女子学生でキレルという回答をした高得点群は, 父親を固いというイメージでとらえており ($t=2.05, df=118, p<.04$), また小さいというイメージでとらえていた ($t=-2.14, df=117, p<.03$)。一方彼女たちは, 母親を嫌いというイメージでとらえていた ($t=-2.11, df=108, p<.04$)。有意差は認められなかったが彼女たちの母親に対するイメージでは, 不愉快なという評価を下す傾向があり ($t=-1.89, df=118, p<.06$), また, 激しいととらえる傾向があった ($t=1.80, df=118, p<.07$)。

考 察

本研究では下坂たち(2000)が中学生を対象に、衝動性に関する調査で使用したバージョンをそのまま、大学生を対象とした自己評価項目として用いた。崔京姫(2000)の大学生バージョンを用いることも考慮したが、言い回しがやや婉曲になっており、むしろ中学生バージョンの方が直裁的でよいと判断した故である。大学生を対象としていることもあって、崔の得た結果と今回の結果は極めて類似しており、キレルという言葉に代表される衝動性が、現在青少年の行動を把握する場合、一つの指標として有効であることが改めて確認された。

これらの先行研究をふまえ、本研究は、キレルという行動に代表される衝動性と親子関係のあり方に、何らかの関連が認められるのではないかという仮説を検証することを目的とした。

青少年が犯す、衝動的な反社会的行動がマスコミで報道されると、必ずといっていいほどキレルという表現が使われ、人々はその短絡的な思考と、結果としての向こう見ずな行動に仰天する。キレルという心理現象が多くの場合、自分、あるいは他者に対する攻撃行動に具体化されるからである。しかしながら動物社会から攻撃行動を見るとき、それは典型的には捕食のための行動であり、また捕食されることからの回避でもある。その他にも群れ社会の優劣順位の調整や社会ルールの学習、あるいはコドモの離乳と自立を目的とした、親から子に対する攻撃もある。ここに示されるように、攻撃は元来、進化生態学的な適応の意味を強くもつ。

攻撃が適応的であるという一般原則は、人類にも適用される。しかしながら他の動物に類を見ない複雑な個体間関係をその社会的特徴とする人類は、それに成功したか否かは別として、可能な限り攻撃を抑制しようと務めてきた。人類社会では、人間関係を壊してしまう攻撃は、社会的規範から逸脱する行為なのである。したがって親たちは、子どもの怒りをコントロールし、ストレスに対する感情耐性を養い、攻撃を抑制するしつけをおこなう。

このようなスキルは、従来はきょうだいや友達との交流の中で、あるいは親の指導の下で自然に子どもたちに獲得されてきた。しかしながら少子化社会の現代、また消費物資にあふれる今、親は子どもの要求するものは何でも与え、欲求を抑えて我慢をさせるという経験を重視しなくなった。こうして子どもたちには、自己中心的傾向が助長されていった。この現象がいつ頃から目立つようになったのかは荘厳(2005)の分析に譲るが、現代の子どもたちには家事労働は期待されないし、一人でPCゲームに興じるとき、友だちとの遊びを通じて社会的スキルや人間関係形成・維持スキルを獲得することもほとんど期待できない。親や社会は、「してはならない」とか「しなければならぬ」ということを教えずなくなり、子どもたちはいわば「レッセ・フェール」の状態に留め置かれたまま大人になってくるのである。

柏木(2003)はこの現象を、「成人への移行的できごとが引き延ばされる」と表現する。しかし荘厳(2005)は、情報化社会に移行して、大人と子どもが同じ情報を共有するようになった結果であると分析する。完全に同じとはいえなくても、テレビを通じて親子が情報を共有するとき、かつては大人と子どもの間に存在した「しきり」がなくなる。こうして親子は平等になり、平等になったことで親は子どもに対するしつけ責任を放棄する傾向にある。

もちろんこれとは逆の分析もある。しつけ教育機能は家族ではなく、昔から地域のコミュニティや異年齢集団など、社会そのものにあったという見解である。そうしてむしろ今、「家族のみが子どもの最終責任者としての地位を強めてきている」と、現代家族に同情をよせる（広田照幸，1999）。その通りではある。がしかし、現代家族がその責任者としての地位を強めているという見解には反対である。なぜならば家族は既に社会的単位としてのまとまりを失い、漂流し始めているからである。

家族が漂流し始めたのは家屋構造の変化を契機とする。中根千枝が「タテ社会の人間関係」で分析したような、家族全体が用向きに応じて自分たちの居場所をかえるという生活は、中央公論にその意見が発表された昭和39年5月号当時こそ、まだ日本社会の多数派であった。しかしそれはすぐに、ドアで仕切られた2DKの個室に取って代われ(51Cプラン)、家族が分断されていった。少し古いが、シチズン時計が1999年におこなった「夫婦の対話時間」調査によれば、25年前におこなった調査では見られなかった会話ゼロの夫婦が10.2%に増加し、20.1%を占めた1日15分程度の夫婦が34.9%に増加するなど、夫婦のような密接な関係でも疎遠化が進行しているのである。それが家族の現状である。

そこで本研究では、家族の生活環境が変化したというその部分に着目し、互いに個室に閉じこもるようになった現代社会の親子が、その関係性をどのように希薄化させていったのか、またそれは感情制御という社会的スキルにどのような変質をもたらしたのかを検討した。

結果に示したように、今回の結果は非常に単純な結論に結びつく。それは親子・家族という社会的単位の重要性が、過去から一貫して変わっていないという結論である。今回の調査で示されたように、キレるという自己評価をおこなった学生たちが、自分の子ども時代の親子関係を否定的方向で評価しているという事実は、家族がうまく機能しないときに、感情制御行動の発達が阻害されることを強く示唆する。

感情制御に対する悪影響は、恐らく、乳幼児期に形成されるアタッチメントにまで遡ることができる。アタッチメントについては過去、少なからぬ研究がおこなわれてきたが、それはほぼ母子関係に限定されており、ラムとその共同研究者たちが父親に対して着目するまで、長年にわたって父子関係の重要性は無視され続けてきた（Lamb, 1975, 1997; Lamb, Pleck, Charnov, & Levine, 1987）。ボウルビーがアタッチメント理論を構築するに当たり、ローレンツのインプリンティングの概念や、安全ということのもつ進化生態学的意味を参照したことでわかるように、アタッチメント研究者たちの目はもっぱら、生物学的つながりとしての母子関係に注がれていたのである。

当然のことながら、発展途上国や過去の時代が物語るように、子どものアタッチメント対象は母親に限定されるわけではない。確かに発達の初期こそ、アタッチメント対象は母親に対して志向される。しかし対象が誰であれ、自分は安全に保護されているという心理的安心が大切なのであって、アタッチメント対象が母親でなくとも、心と行動の発達において問題は生じない。

しかしながらやはり父親の影響は大きい。例えば父親が子どもに対して支持的・共感的に振る舞う場合、その記憶は大人になっても強く残っており（Brody, 1999）、子どもの向社会的行動が促進される。父親は、子どもの共感性形成と強化に大きな役割を果たしているのである。母親がその最初から、例えば子どもに栄養的に関わっていくのに対して、父親はもっと後から、例えば男児にはその攻撃性

の制御を、女兒にはその社会性の育成を目的とした関わりをするように (e. g., Lytton & Romney, 1994), 母親と父親では子どもに対する関わり方は異なっている。父親・母親それぞれの性役割がうまくかみ合っただけで、社会に対して自己を肯定的に関わらせることができる子どもが育つのである。

父親の子どもに対する関わり方は、社会的な関わりが中心となる。そのため、例えば父親が子どもに対して冷たく、距離を置く関係にあるとき、暖かく支持的である場合とその様相が異ならざるを得ない。共感や他者に対する感情移入なしに人間の社会生活は成り立たない。つまりこれらの感情的関わりこそがヒトの人間である所以であり、子どもの社会化の目標はここに置かれる。男児の反社会的行動は女兒の 10 倍にも達することを考え合わせると、この感情教育は特に男児に強調して与えられなければならない。だから父親という、子どもの社会化におけるモデリング対象が不全である場合に男児は、その感情制御面での問題を抱え込んでしまうのである。

その傾向は今回の調査でも裏づけられた。女子学生たちのキレる衝動は、男子学生に比較して父親、あるいは母親に対する否定的評価の方向性にあまり結びついていないのである。女子学生たちは父親に対しても母親に対しても、男子学生に比較して否定的方向での評価が少ない。ただ、男子学生と比較したとき、女子学生の方が自分を衝動的であるとかあるいは穏やかな気分であることが少ないという評価をしているが、従って女子学生のこの自己評価は、家族関係以外の要因で検討される必要がある。

現代は女性の様々な権利が尊重され、表面的には男女平等参画社会であると言われている。しかしそれは、恐らく表面上だけのことであって、社会からのストレスは未だ女性の方に強く押し被さっていることが推測される。表面上はなくなったかのように見える性による様々な差別が、社会と人々の心の深層に未だ色濃く滞留していることが、女子学生たちのイライラ感や焦燥感に表されているのであろう。

最後に議論しておくべき問題は、家族間コミュニケーションである。よく、アリエスは「子供を発見」したがラムは「父親を発見」したといわれる。子どもの社会化における父親の影響を最初に指摘したのが、ラムとその共同研究者たちだったからである。

しかし、ヒトがチンパンジーの系統から分離してアウストラロピテクスというホミニド(原初人類)に進化したときから、生物学的存在ではなく社会的存在として、父親がいた。今から 370 万年前に生きてと推測される三人の歩行の痕跡が、そのことを示している (Leakey & Hay, 1979)。

先にも述べたように、家族という構造は必ずしも直接に遺伝子を共有する関係だけで成り立つわけではない。つまり 3 人が寄り添って歩いていた痕跡は、オスと子どもの間に直接の血縁関係があったことを意味するものではないが、オスがメス、およびその子どもを保護し、家族としてまとまっていたことを物語っている。オスとメスのこのような安定的な関係は、彼らが帰属する集団の社会的承認無しには成立しない。しかし家族は、どういう手段を介して、最小の社会的単位としてまとまることができるのであろうか。それはコミュニケーションである。

言葉がなかった長い間、家族や親しい関係のコミュニケーションは、グルーミングに代表される行為で代行されたと思われる。しかし今から 3 万 5 千年ほど前から、言葉が登場し、コミュニケーションは言語を使った意志疎通を第一とするようになった。シチズン時計の調査では夫婦間コミュニケー

ションは明らかに減少しているのだが、荘厳・荘厳（2003）も現代家族におけるコミュニケーションについて調べている。

調査は大学生を対象におこなわれたが、現代家族において想像する以上にコミュニケーション量が豊富であるという結果を得ている。しかしこの研究にはいくつかの欠陥がある。それは、被験者の回答に対する信頼性の検討がなされていないことと、コミュニケーションが平均、あるいは平均以上にある・なしという回答がどのような基準に基づいてなされたのか、検討が難しい点である。

もう一つ残された問題がある。主観的印象に頼るこのような調査では、実際以上に高い評定が出やすいということである。

例えば 2001 年におこなわれた「家族のコミュニケーションと IT」の調査（内閣府編、平成 13 年度国民生活白書）では、携帯電話やインターネットなどが家庭に入り、家族間のコミュニケーション量が増加したという肯定的結果が導き出されている。しかし同じ白書には、携帯電話を子どもが所有しているとき、親はその話し相手が誰であるか知らないことが多いと分析されているし、子どもは家族に内容を知られることなく友だちと連絡できることがメリットであると考えている。

確かに主観的評価としては、「今、どこにいる」という会話内容も含めて、家族間コミュニケーションが増加したという印象に間違いはないのであろう。しかし、こと子どもの行動では、携帯電話を持たせたことでかえって子どもの行動が見えなくなったと回答している親も多い（母親：45%、父親：29%、平均：36%）。数値が示すように、父親の子どもに対する関心は母親よりも弱い。また子どもは、友人中心に行動するようになったと答えている。しかしともかくもコミュニケーションが豊かな現代家族は、本当にそのまとまりを維持し得ているのであろうか。

これに関連した別の政府調査がある。内閣府が 2004 年 6 月におこなった国民生活に関する調査である。調査は複数回答を認めているが、現代の社会問題としてトップに上げられたのが道徳意識の低下（55.6%）、人々の連帯意識の弱まり（54.3%）である。以下、人間関係の涵養力低下（44.5%）、核家族の増加（41.8%）、青少年のテレビやビデオゲームの問題（38.8%）に続き、第 6 番目に親子関係の希薄化（27.5%）が上げられている。さらに、19 歳未満の青少年では親子関係が脆弱化しているという回答がほぼ 5 割近くを占める。先の国民生活白書にもこの問題は取り上げられているが、年齢が上がるにつれて親子の絆が弱まっているという考え方が多くなる。明らかに家庭あるいは家族構造に何らかの問題が発生しているという意見は、無視できない比率に達しているのである。

その原因が父親にあるのか母親なのか、あるいは家庭がおかれている社会的環境そのものにあるのか、これはプライバシーに踏み込むことを避ける現代の社会調査では確認のしようがない。しかし、今回の調査で示されたように、父親に対する否定的方向の評価は、同時に母親に対する否定的評価にもつながっており、キレル方向に自己評価した学生たちの家族環境は、何らかの問題を抱えているということは容易に推測がつく。

日本の家庭において、父親が占める位置は年々軽くなっている（荘厳、2005）。江戸時代には父親が子育ての第一線に出ていたが、その姿は明治以後徐々に後退し、特に昭和 30 年代以後の日本では、母親の陰にその姿を隠してしまった。常に顔を合わせる家族であるから、互いの中に感情的摩擦が発生するのは当然である。しかし特に父親は、子どものしつけを含む育児を妻に押しつけ、自分は経済

的役割を果たせば家族に対する義務を果たしたことになるとばかり、摩擦を生み出す子どもとの感情的関わりを避ける傾向にある。妻とさえ、1日15分程度の会話しか交わさないのが現在の父親の実像なのである。そうした父親の行動が、親との心理的つながりが持ちにくいという感情を現代青年たちの心の中につくり出している。

キレる青年たちは、家族との感情の相克を抱えているのである。今一度、互いの絆を確認しあうためのコミュニケーションがどのようにおこなわれているのか、またそこに感情がどのように介在しているのかという問題について、家族の研究をおこなうことが必要であろう。

引用文献

- Baron-Cohen, S. (1991). Precursors to a theory of mind: Understanding attention in others. In A. Whiten (Ed.), *Natural theories of mind* (pp. 233-252). Oxford, England: Basil Blackwell.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol. 2: Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol. 3: Loss*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1983). *A secure base: Clinical applications of attachment theory*. London.: Routledge.
- Brody, L. (1999). *Gender, emotion, and the family*. Cambridge, MA.:Harvard University Press.
- 崔京姫. (2000). キレ衝動の尺度作成の試み. *Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology, Vol9-10*, 55-58.
- Griffin, D. W., & Bartholomew, K. (1994). Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*, 430-445.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1994). Attachment as an organizational framework for Research on close relationships. *Psychological Inquiry, 5*, 1-22.
- 広田照幸. (1999). 日本人のしつけは衰退したか. 講談社現代新書 # 1448
- 柏木恵子. (2003). 家族心理学. 東京大学出版会
- Kobak, R. R., Sceery, A. (1988). Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development, 59*, 135-146.
- Lamb, M. (1975). Fathers: Forgotten contributors to child development. *Human Development, 18*, 245-266.
- Lamb, M. (1997). Fathers and child development: An introductory overview and guide. In M. Lamb (Ed.), *The role of father in child development* (3rd ed., pp. 1-18.). New York: Wiley.
- Lamb, M. E., Pleck, J. H., & Levine, J. A. (1985). The role of the father in childhood development: The effects of increased parental involvement. In B. B. Lahey & A. E. Kazdin (Eds.), *Advances in clinical child psychology, Vol. 8*, pp. 229-266. New York:Plenum Press.

- Leakey, M. D., & Hay, R. L. (1979). Pliocene footprints in the Laetoli beds at Laetoli, northern Tanzania. *Nature*, 278, 317-323.
- Lytton, H., & Romney, D. (1991). Parents' differential socialization of boys and girls: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 109, 267-296.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- Poltmann, A. (1961). 人間はどこまで動物か(高木正孝訳). 岩波書店.(Poltmann, A.(1951). *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen*. Basel: Springer Verlag.)
- Rholes, W. S., Simpson, J. A., Campbell, L., & Grich, J. (2001). Adult attachment and the transition to parenthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 421-435.
- 下坂剛, 西田裕紀子, 齋藤誠一, 伊藤崇達, 神籙貴昭, 柳原利佳子, 鶴田弘子, 久木山健一, 西田紀子, 西村亜希子, 榎本千春, 坂本由香, 前川雅子.(2000). 現代少年の「キレル」ということに関する心理学的研究(1). 神戸大学発達学部研究紀要, 第7巻第2号, 1-8.
- 荘巖舜哉.(2005). 日本の子育ての知恵. 大日向雅美・荘巖舜哉(共編)子育ての環境学(pp. 57-91). 大修館書店
- 荘巖舜哉, 古川義和, 藤村邦博, 竹内伸宜, 坂井明子, 土江伸誉, 荘巖依子, 澤田匡人, 谷口高士.(2000). 地方に居住する中高年者の人生観(1): 静岡県水窪町をフィールドとする聞き取り調査. 大阪学院大学人文自然論叢 Vol. 41-42, pp.1-56.
- 荘巖舜哉, 荘巖(赤尾)依子.(2003). 子ども期の回想に見る現代青年の親子関係. 発達研究第17巻, pp. 1-23.
- Tizard, B. (1977). *Adoption: A second chance*. London: Open Book.
- Tomasello, M. (1995). *Joint attention as social cognition. Joint attention: Its origins and role in development*, Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum.
- van Hoof, J. A. R. A. M. (1972). A comparative approach to the phylogeny of laughter and smile. In R. A. Hind (Ed.), *Non-verbal communication*. pp. 209-241. Cambridge: Cambridge University Press.